
道は一つしかなかった

須崎杏子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

道は一つしかなかった

【Nコード】

N5282E

【作者名】

須崎杏子

【あらすじ】

売られた双子。召使として生きていた。しかしあることにより召使から開放されたが

……お母さんなんて嫌い。なんで私たちを売ったの？

「ごめんね」

お金がなかったから？ 醜かったから？

「ごめんね」

ほら、この言葉。そんなこというなら売らないでほしかったのに。

才母サンナンテ嫌い

「ん……」

今日の夢見は悪かった。小さいときの夢。忌々しい記憶。

「おい」

「あ、ネオ。ちょっと今からいくから」

そんなこと言っているとネオは出て行った。

「ほら、こんどはあっちの広場！」

……なんで私達はこんな人に売られたのだろうか。荒々しい。
「……」

ネオなんて嫌がっている。本当は裕福な暮らしを望んでいた……。でもそれは昔のこと。どうにもできない。

そう思っているうちにネオは広場へ出て行った。

「ぐずぐずしてないで階段を掃除しておいで！」

早く戻って来て。ネオ。

階段の掃除は終わった。だけど妙に遅い。もう終わっているはずなのに……。

「……心配だなあ」
私はネオの元にいった。

「ハア、ハア、ハア……」
ネオの息を吐く音が聞こえる。そんなはずは無い。いつもはすぐに終わったはず……。

「……！？」
私は信じられない光景を、目にした。
「ネ……オ……？」

手元には、先のない先端が尖ったほうきの棒。赤黒い、鮮明な血が付着していた。
その横には若くはない女性の死体。胸元からじわじわと血が出てくる。まだ生きている。

「ネオ……貴様……」
「死ね」

冷たく、残酷な感じがした。おそらくネオはこの女性……。いや、私たちを召使いにあつかっていたおばさんのことが凄く気に食わなかったのだろう。

「グッ」
足を手に、動けない状態にして脳を貫いた。おそらく死んだだろう。ネオはそれ以上は用が無いとし、棒をそこらへんに捨てて逃げた。私を置いて

私は掃除した振りをした。そのあと、私は引き取られた。けど運良くいい人だった。

「大丈夫？ 怖くなかった？」

「うん……」

でも他の人は私を殺人鬼だと思っている。だって近くを掃除していたもの。そう思われても可笑しくは無い。

「ネオっていう男の子知りませんか？」

「知らないわよ？ 家族なのかな？」

「うん……。売られた身だからお母さんはいないけど」

「大変だったわね……」

私はうれしかった。ただ頼れるのはこの人のみだった。

「お母さん置いてかないで」

私は大泣きする。でもしらっとした顔で置いていった。お母さんは私を愛してくれなかった。もちろんネオも。

「お母さん、お母さん……」

何度も呼びかける。が、聞こえていない振りで去っていった。隣にいたネオは追いかけていった。だけでも追いつけなかった。

理由は簡単。あの女性が私たちを引きとめたから。

「なんで……」

今までお母さんが好きだった。けど気持ちは憎しみに変わる。

「おかあ……」

……またか。何度あの夢を見たか。

「おはよう」

「あ、おはようございます」

私はおばさんに挨拶を返した。おばさんはメモを渡すなり

「買ってきてくれる」

といった。ここの街は慣れていないけど店の場所ならすぐわかった。

「えつと人参、じゃがいも……」

作るのはカレー。なげかりんごも買う。

「これとこれとこれをください」

お金を渡し、家に帰る。しかし家を見た時、異様な感じがする。家のガラスが割れているのだ。

「何かあったんじゃないか……」

家に入ったら荒れていた。そして赤黒い何かが見えた。

「え……」

人参とじゃがいもや玉ねぎを落とす。その弾みにりんごが赤い赤い水溜りに落ちた。

忌々しい記憶と恐怖がよみがえる

「おばさん……」

胸からでた血は止まっているか、脈はあるか。探ってみたが後の祭りだった。

「強盗が入ったんだって」

近所の人はそのことをいいあう。

「もしかしたらあの子かも知れないよ」

「ありそうよね、そういうこと」

「恩知らずの子よね」

醜い汚い心の大人が耳で言いあう。なぜ私は不幸なんだろう。私

はしていません。って言う勇氣はない。

「あの子が災いを引き起こしてるのじゃないかしら」

私はその言葉を聴くと走って逃げた。ちがうから。私を生んだお母さんが悪いのに。

「うるせえ！ こっちは腹すいてるんだよ！」

私は席に座って何かを注文した。パンだ。

「お客様。ここは店なんですから、お金を支払ってもらわないと…

…」

「そんなもん持ってねえよ」

「なら働いてそのお金の分返してもらいますよ」

「かたつぐるしいことできるか」

こんな言葉が続いている。だれがこんなことをしたのだろう。答えは、私のよく知っている……

「お、ネミ。金貸してくれ」

ネオだった。いつもどおりに振舞う。

「いやよ。このお金は大切に使うの。ただ食いなんかした人に貸せられるわけではないもの」

「お願いだ」

「……何円」

「１８０円」

「わかったわよ」

袋から１８０円を取り出し渡す。

「ありがとな」

払いに行くネオ。なんだか私まで恥ずかしい。

「なんであんなことしたの」

「いや、お腹へってて」

「~~~~っだからってただ食いはしないの!」

私もいつもどおりにしている。

「なんでいなかったの」

「いや、おばさんに命令され……」

「嘘つき」

私は、そういった。彼は戸惑う。

「そのおばさんを殺したのでしょうか? 憎くて、悔しくて」

「……うるせえ!」

私を突き飛ばし、逃げていった。

「……本当のことってよ」

そこにネオは、もういない。

「痛っ」

足を軽く打撲した。けど長距離歩くには不利である。私はある一軒の家に寄りかかる。

「はあっはあっ」

今までにたまった疲れが一気にでる。とにかくチャイムを鳴らしてみる。すると誰か出てきた。

「ん? 誰?」

「や、休ませてください」

とにかくそういった。

「足、紫色になっているし……。よし! こっちにきて!」

足を引きずりながら家の中にはいる。

「このソファで寝てて」

ふかふかのソファ。そこに寝転び、次第に意識が吹っ飛んでいった。

「お母さん」

そこにはもう人間ではなくただの肉の塊があった。

「お母さん」

私が殺した。原形が無いぐらいに。

「お母さん」

また、返事をしてくれない

今朝はいつにもまして夢見が悪かった。

「おはよーっ」

「おはよう……」

そういえば名前きいていなかったし、名乗ってもないから言おうとしていたけど相手が先だった。

「君の名前、なんていうの？ 私はマナよ」

茶色い長い髪を三つ編にしている。頭止めがよくにあっている。

「私の名前、ネミと申します……」

「かしこまらなくていいよ。なにしてたの」

「ある人をさがしていたの」

眠いのを抑え、そういった。

「あ、そうなの？ がんばれ！ 足もけっこうよくなったよ」

いや、良くは無い。腫れているし青紫色……。

「で、何があつたの？」

「それは」

今までの話をマナにいった。そして

「私に残された道は『死』しかないの」

「なんで？」

「それが……私に残された道だから。開放と自由という道なの」

「そんなの間違ってているよ」

だけどやっぱりそれしか道がなかった。マナは必死に引き止めていたけど……。

「んじゃあ……ありがとう」

「もういくのー！？ まあいいけど
どっちなの。そういいたくなる。」

「お詫びにこれ……」

朝食代をマナに投げて送る。

「うん！」

足を引きずりはしないものの、まだいたい。とにかく川のそばに
いだけ。

「毎度あり」

ナイフを買った。生活に必要なものだから。

「なにか川を越える場所ないですか」

そうきいたら定員さんは

「あの道具屋のそばに橋があるよ」

と答えてくれた。

「ありがとうございます」

あとは川を越える。

川が見え、橋があつた。しかし異変があつた。ネオがいるのであ
る。

「！」

ネオは逃げようとした。が、私は呼び止める。

「逃げないで」

「なんでだよ」

そろそろと後ろにさがるネオ。

「私とネオは……ここで尽きるの」

死んだほうがまだから……。

「俺は自由に生きるんだ」

そういつてまた逃げようとした。けど袋が引っかかり逃げるこ

ができない。その間私はナイフでロープを切る。

「あ……」

橋は崩壊し、転落する。ネオはロープに必死につかまっていた。けど力尽きてしまった。

激流の川の水。助からない。意識が朦朧とした。

コレデ自由ニナレタ

「なにか二人水死体があったそうよ」

「橋の崩壊かあ」

マナはその話を聞いた。そこで思ったこと。それは

『それが……私に残された道だから。開放と自由という道なの』

ネミがそういつていたことを思い出した。

「あれほど死ぬなって言ってたのにね……」

だが、それはネミにとって望みたくもなかったことではないか。マナはそう思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5282e/>

道は一つしかなかった

2010年10月8日15時20分発行